

S キリスト教会の発展過程

集団のライフサイクル論の視点から

作 道 信 介

要 約

本論は、強い個性をもつ指導者によって創られた独立キリスト教会、S 教会を対象に、その歴史的発展過程をグレイナーによる組織のライフサイクル論を下敷きに記述する試みである。S 教会の発展過程は指導者の指導方針、指導者と信者の権力関係を軸に次の4つの段階にわけられた。

1. 指導者の魅力による成長 vs 指導層の不足による危機
2. 各自の創造性による成長 vs リーダーシップの危機
3. 指導者の指揮による成長 vs 信者の自律性の危機
4. 権限委譲による成長 vs 組織の統制の危機

それぞれの段階は以前の段階の影響を受けており、ある段階で成長の要因となった指導形態が集団の規模拡大によって危機を引きおこし、それを新しい指導形態によって克服するという過程を通じて集団は発展する。しかし、根本主義的な教義をもつ本事例の場合、自律的な組織発展を縮減する“信仰覚醒運動”が指導者自身や青年信者層によって生じ、組織発展を抑制することが見い出された。

・課題と接近の枠組み

セクト、カルト、デノミネーションと分類され、次々と出現する宗教集団、そのなかには官僚化された組織構造をもち、おびただしい数の信者を要する巨大宗教組織へと発展していく集団もある。しかし、さまざまな神々をもち多彩な活動を行う、これら宗教集団の始まりがカリスマ的指導者によることは共通した事実である。カリスマ的指導者は、既存の宗教的伝統や世俗社会に対するプロテストを主張して現れ、次第に多くの信者を集めていく。当初、この小さな集団は、指導者のプロテストそのままに世俗社会や既存宗教に対して極端な態度をしめす。しかし、信者の増大、組織の整備につれて、主張もより穏当な内容へと“成熟”する。本論では、昭和初期に設立されたキリスト教会 S 教会を事例として、宗教集団の発展過程に関わる要因を考察する。

具体的な調査報告以前に、宗教集団の変容過程についてこれまで得られた知見を検討することで課題をより特定化し、本論の接近枠組みを明らかにする。これまでの研究には大きく分けて2つの流れがある。ひとつは、変容の原因を外部環境の変化に求めるものである。外部環境の変化とは、

Beckford, J.A (1973) によれば、迫害・国家の介入・地方共同体・親族と地域の利益・他集団との競合あるいは共同・社会変動等であり、これら変化に対応するため組織の内的構造も変化する。しかし、この立場にたつ研究には、外部の環境の変化がどのように組織の内部構造や人間関係を変え、集団全体が変質していったかを捉える具体的な視点に欠けている (Hackett, 1980; Johnson, 1963; Robertson, 1970; Wilson, 1970)。

社会変動・迫害といった劇的な出来事ばかりが、宗教集団を変える要因ではない。もうひとつの立場は、宗教集団の変容を組織の拡大に伴う必然的過程とみるものである。たとえば、Johnstone, L.R. (1975) は、「集団規模の拡大の法則」をいう。要約すると、規模の拡大とともにサブ・グループが発生し調整が必要な段階に至る。そして多くの人々の活動や役割の調整が専門家に集中され、規範は形式化し集団はその自発性と柔軟性を失う。対馬 (1987) は、同様の指摘をするとともに、規模の拡大につれてカリスマの分散がおこなわれ、それが組織の統合にとって脅威となること、また実務的リーダーが出現しカリスマの指導者と対立することを述べ、規模の拡大が集団内の権力関係に大きな影響を与えたとした。森岡 (1980) は、「リーダーの登場、それを取り巻くインフォーマルな集団の出現、集団の公式化、組織化、制度化という、宗教運動内部の累積過程が、それ自体の内に形式主義さらには解体への傾斜をはらんでいく」と主張する Moberg, D.O. の 5 段階説を下敷きに、宗教集団の発展過程を分析することを提案し、自らの研究結果として、1) 政府機関との交渉、2) 参加者の数と増減傾向、3) 世代交代が、組織化・制度化の内容を規定するとした。

以上 2 つの視点から筆者は、宗教集団の発展過程には規模の拡大とともに通過しなければならない基本的な段階があることを前提に、外部的な環境からの影響を考慮する必要があると考える。宗教集団の発展過程は、内部と外部の偶発的緊張関係を軸に展開するだけではなく、より自律的な発展過程をたどるとする見方が適切であろう。その際、静的な段階論ではなく、各段階が有機的に結びついて発展する過程として描くモデルが必要となる。上記研究が主に大規模教団に焦点をあてていること、実際は S 教会を含めて宗教集団の多くが小規模集団にとどまっていることを考えあわせると、指導者と少数信者から出発して大規模化する全過程を過不足なく一貫して理解するモデルであることも条件である。

この観点から、非常に示唆的なモデルが組織成長論のなかにある。Greiner, L.E. (1972) は、一般企業の組織の成長を規定するものとして、外的諸力ではなく組織の年齢 (age)・組織の規模 (size) を考え、5 段階の必然的な成長段階を仮定した。この成長過程には、連続的に成長する進化期間と進化と進化の間にあって急激な変化が生じる変革期間があり、進化期間をささえていた経営戦略が次の段階へ進むために乗り越えるべき危機をもたらし、たとえば、発展の初期には各自の創造力によって成長するが、規模の拡大とともにリーダーシップの危機がおとずれ、それを強力な指揮によって克服すると、各自の自律性が損なわれる危機をむかえる (図 1)。経営戦略の変化に対応して経営の焦点・組織構造・統制システム・経営報酬の力点も変わっていく (表 1)。組織のライフサイクル論である (小林、1988 参照)。

図1 成長の5段階
(Greiner, 1972, p.41, 安村, 1985, p.67)

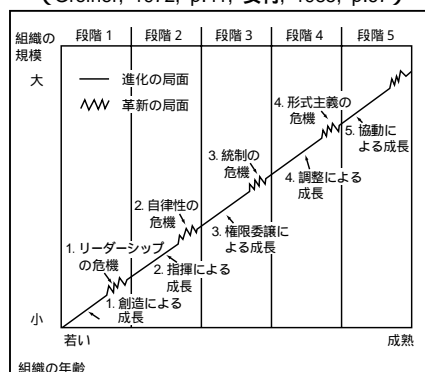


表1 成長の5段階における「進化」期間の組織運営
(Greiner, 1972, p.45, 安村, 1985, p.68)

	段階1	段階2	段階3	段階4	段階5
経営の焦点	製造と販売	オペレーションの効率性	市場の拡大	組織の結合	問題解決および革新
組織構造	インフォーマル	集権的および職能部制	分権的および地域別制	ライン・スタッフおよび生産グループ	チーム・マトリックス
トップマネジメントのスタイル	個人主義型および企業家型	指揮型	権限委譲型	監視型	参加型
統制システム	市場の成果	標準およびコスト・センター	報告およびプロフィット・センター	計画および投資センター	互恵的目標設定
経営報酬の力点	所有	給与と報酬の増大	個人ボーナス	利益配分および持株制度	チーム・ボーナス

このモデルをある宗教集団に適用して、歴史的発展を記述するのが本論の主旨である。たとえば、宗教集団、特に個性的な指導者に率いられた集団の発展過程にあてはめた場合、経営戦略にあたるのは教義でありそれを実践するための指導方針であろう。集団を維持する上でもっとも重要なのは、信者をいかに統制するかという、指導者と信者の権力関係にかかわる要因である。先に対馬が指摘したように、規模の拡大はカリスマの分散と統合の問題を引き起こす。多くの信者を統合するには、有力な信者に権限を与えて指導させる必要があるが、集団全体を統合する権限は指導者になければならない。権限をどこまで信者にあたえるか。実務的権限はあたえても、“霊的”権限は自分に集中させたり、最終的には、各指導的な信者が霊的にも独立した活動をしながら、組織としてのまとまりをもつ形態に至る場合もある。結局、指導者と信者の権力関係をめぐる綱引きが集団の構造的なストレインとなり、その解決を通じて集団は変容していくと考えられる。

もちろん、宗教集団は、集団としての利益や経営報酬が明確に査定され統制の根拠となる一般企業とは異なる側面をもつ。たとえば、S教会の場合、後述するように、“報酬”にあたるのは、個人の救済である。救われるための努力やその評価は指導者に委ねられる反面、究極的には、超越的な神によって予測しがたく示される。“報酬”は、教会活動への参加（奉仕）教会内の職務遂行、知識の学習、日常生活における“試練”への対応によって、可視的に推測・確信される一方で、そのような推測・確信が本当に個人の救済を意味するのか、つねに問われるのである。

本論の目的は、組織のライフサイクル論によって、宗教集団の発展過程を説明することではなく、ライフサイクル論を下敷きに発展過程を記述しつつ、S教会の特色を明らかにするところにある。

具体的には、指導方針、指導者と信者の権力関係を中心にS教会の歴史を成長と危機からなる段階に区分し、規模と組織年齢の影響を把握する。また権力関係の変化とともに、各段階ごとに1) 教義、2) 組織構造、3) 教会内の人間関係（T先生と信者の関係・信者同士の関係）、4) 布教形態、それぞれの変化に着目する。

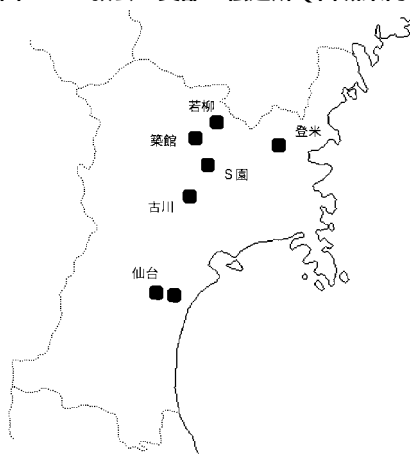
．対象と方法

1．対象

1) S教会の現状

調査対象は、宮城県仙台市に本部をおくキリスト教会S教会である。S教会は、既存のキリスト教勢力と直接的な繋がりをもたない単立教会である。信者数は、名簿上400名余りであるが、各種行事への参加状況からみて実質150名程度とみられる。本部は仙台市にあり、そのほか、登米・築館・若柳など宮城県北部地域を中心に、福島・山形・東京を含む12伝道所がある（図2）。

図2 S教会の支部・伝道所（宮城県内）



2) 教義の特色

教義の特色は次の2つにまとめられる。

（1）罪の相対化・絶対化

罪とは、律法に違反することではなく、律法をもとと守ることができないということすら知らないこと、つまり神を知らずに生活することをさす。その点で、人間だれしも平等に罪人である（相対化）。この罪を償うことは、人間の力ではできない（絶対化）。罪が贖えないならそれは地獄行き必定である。その解決は、神の子イエスが罪人であるわれわれのために十字架にかけられたという「代償贖罪」をいただくことにより可能である。「悔い改め」をした人間は、地上にいながら神の国にいる「死に勝利した者」であり、神の救いのうちにある。

（2）クリスチャンの義務

クリスチャンは、罪認識について教えられているのだから、神に対して「悔い改め」の義務がある。しかし、この「悔い改め」は、教会に通ったからなされるというものでなければ、本人が一生懸命努力したからといってできるものではない。まったくの神の意志次第である。したがって、信者は非常に不安定な状態におかれている。信者は「クリスチャンには死がない」といわれるが、自分が真のクリスチャンかどうかは、つまり救われているかどうかは、あくまで神と自分との関係でしか決まらない。したがって、信者は、様々な機会をとらえて神の救いの印を状況や自分の経験から見い出さなければならない。時には、重病や不幸すら神が見守っている証拠として考えられることもある。予定説にたつ根本主義的プロテスタントの伝統上にある。また、後の教義の展開のなかでクリスチャンがはいるべきより一層厳しい救いが、特殊恩寵であり、一生涯キリスト教に触れる機会がなかった人は、一般恩寵という神の救いのなかにすでにはっているとされた。

3) 創立者 Y.T. 「T 先生」

S 教会の特色は、創立者の Y.T. の強烈な個性にある。文字通り、裸一貫で教会を発展させてきた実績に裏打ちされて信者の信頼は厚く、自分自身を「神からたてられた伝道者」すなわち、神から選ばれて伝道をさせられている者と位置づけている。禿頭、福耳、ぎょろりと人をみすえる目、背は高くないが、撫で肩でどっしりとつきでた腹、常に和服をまとい、何時間も疲れをしらず信者に説教をする姿は、人々に強い印象をあたえる。信者は信者同士の気のおけない集いでは、「うちの先生は、教祖的だから」と困ったような嬉しそうな笑みを浮かべながら語る。本論では、この創立者 Y.T. を教会内でのよび方にならって「T 先生」と呼んで記述する。T 先生は、信者に代わって神に責任をとる責任者と信者の信仰を評価する評定者の役割を果たしている。例えば、S 教会では、聖書に定められた儀式である洗礼すら今までおこなわれたことがない。洗礼を受けることは、救われていることが前提であるが、その理解には信仰的な成長がなければならない。しかし、「教会の信者はまだその段階に至っていないので、おこなわない、神には自分が謝ってご容赦願っている」という。それが可能なのは、T 先生が神の子ではなく、むしろ罪人の頭として自分を規定するからである。T 先生自身は信者の全的帰依を求める超越的存在としてあるのではない。自分を誰よりも罪深い者と位置づけ（この位置自体「救い」に近い）、自らの宗教体験を証しとして「死を飲みほした者」として、責任をとり評定できるとされる。

2. 調査方法

筆者が S 教会と接触したのは、昭和56年の10月である。まず T 先生と20時間にわたるインタビューをおこなった。その後、本部で行われる集会や活動、他の伝道所の集会に参加、信者各自へのインタビューを翌57年、6月から9月まで実施し、主要な信者の入信過程についての知見を得る。その後も、教会の信者、特に青年たちとのつきあいが続くうち、昭和58年に、T 先生が病気で倒れるという事件に出会う。その1年後に T 先生は「昇天」するのだが、T 先生死亡後、新体制が発足する昭和61年の夏まで調査をつづけた。この間の調査は、各種集会や本部の話し合いへの参加によって、T 先生の「昇天」の影響に集中した。また、同時に、S 教会を離れていった信者についての追跡調査も行なった。これは、S 教会の歴史を調べているうちに何度か有力信者の造反や除名があり、これが組織の発展とかかわっていることを知ったからである。これらの事件は、その当時の教会で何が問題になっていたかを知る格好の素材である。S 教会の刊行物には、T 先生が書いた教義に関する二冊の本のほかに、「勝利」、「仙台支部便り」がある。これら収集を通じて、歴史的理解に役立てた。それぞれの調査結果の一部は、すでに報告してある（拙論、1984、1986、1988、1992）。

・ S 教会の発展過程

S 教会の歴史的展開は4期に分けることができる。以下それぞれの時期ごとに、特色を分析していくが、その前に、T 先生が教会を設立するまでの生活史をまとめておく。T 先生の生活史理解は

S教会の特色と後の展開を理解する上で重要である。

0. 教会前史（T先生の生活史）¹⁾

T先生は、宮城県石巻市で米の相場師で“豪商”である父親の次男として生まれた。16歳のとき、大実業家を夢見て満州へ、ついで経済学を学ぶためアメリカのコロンビア大学に留学するが、語学力不足のため休学する。この時期に、性欲・マスターベーションの悩みのため“ノイローゼ”状態になり、キリスト教の洗礼を受けた。性欲の問題は、T先生の罪認論の根本にあり、その後のキリスト教観に強い影響を及ぼすことになる。結婚のため帰国後、徴兵検査、入営となるが、そこで天皇への絶対服従を拒否する大事件を引き起こす。転機は、昭和初期の恐慌で家が没落し、最愛の妻を亡くすという出来事から始まった。「現実は何と脆いものか。死の問題を解決しなければ、何もできない」という思いがT先生をとらえた。それ以後、離島で聖書研究に打ち込んだり、各教会の説教を聴くようになる。この時期、T先生につけられた「狂犬」、「教会荒らし」というあだ名は、当時のふるまいを示している。礼拝の最前列で瞑想している青年が、突如、刮目して、説教の最中誰はばからぬ大声で「先生、そこのところ少しおかしいのではないですか」と質問を始める。答えられないと、「サラリーマン牧師」となじって、礼拝は混乱の極みに達する。また、近くの遊廓の娼婦を大勢ひきつれて礼拝に出席して、牧師や信者が困った顔をすれば、「キリストはこの人たちのために来たのではないか」と、その小市民的良識を嘲笑する。このようなT先生を大半の教会はもてあましていたようである。T先生は、ついに東北中会（キリスト教会の集会）で、「聖書だけよる伝道」を主張する。では、自分でやってみろということになった。このような状態のなかT先生は2人の青年ケンタロウとカツゴロウと出会う。S教会の始まりである。

1. T先生の個人的魅力による成長 vs 指導層不足による危機（昭和8年～20年代前半ごろ）

1) T先生の個人的魅力による成長

教会の初期は、T先生の個人的魅力にひかれて集まった青年たちを軸に発展する。さらに3つの時期に分けて記述する。

(1) 昭和8年～17年

自立した伝道を迫られていたT先生の所に青年ケンタロウから登米での伝道を要請する手紙がきた。登米は、当時は“キリスト教伝道の鬼門”と言われるほど伝道の難しい所とされていた。そこへT先生は呼ばれたのである。T先生の説教は、「そこにいる昔からの信者が、世間の人からクリスチャンと見られては困るので、キリスト教の看板をおろしてくれ」という挑発的内容だった。この説教にケンタロウは、「この人から教えられればなんとかなる」という気持ちを抱く。彼は、大人たちを罵倒するT先生に惹かれていった。もう一人の青年、カツゴロウも、8人兄弟の7番目として家に偶居していた。兄は以前からの信者だったが、むしろ兄には反発していて、集会に「ここは男女の密会所だ、教会退治

だ」と乱入したこともある。それが、Ｔ先生に「君は、見込みのある青年だ」と言われたことから、弟子になる。この２人が、終戦までの10年あまり、Ｔ先生を経済的・精神的に支えることになる。先述のような説教のため、集会の参加者は激減した。この時期は、組織的活動ではなく、朝早くからＴ先生のところで聖書の勉強、その後、Ｔ先生自身が戸別にたずねて伝道に行くという状態である。信者数は、ケンタロウ宛の手紙に、クリスマスを12人で祝ったとあるから、10名程度であろう。集会の雰囲気は次の記述によく表われている。

今思うと、当時わたしたちの御言葉一筋に歩む姿は微笑ましいかぎりであった。若い開けっぱなしの先生は、信仰の話ばかりではなく、人生百般、特に性に関する話も思い切ってされた。人の自由の教育のためには必要だったようである。わたしたちは内では強い関心をもってそれを聞いたが、その方の生活は乱れもしなかった。当時はまたいつも会食をした。ライスカレー、うどんなど常食で、男どもの山料理で、食べては談じ談じては食べ、毎晩のように先生のところに集まって、いかねば寝付かれないような始末であった。そしてみなひとつになっていた。今の新旧断絶など論外である（「仙台支部便り」122号、1971.6.15）

集会での話の中心は、「罪」の問題であった。いかに人間が罪深く、死を免れないか。死と罪の問題へのＴ先生のこだわりは、自分の信仰への取り組みが、性欲への罪悪感に発した死の克服にあっただけに執拗だった。

(2) 昭和17年～終戦

この時期についてぜひ述べておかなければならないのは、社会情勢との関係である。戦局の悪化にともない、キリスト教の集会自体が開きにくくなり、とりわけＴ先生の場合「大本営発表は、嘘だ、反対に考えればよい」とか「東条（英機）ばか、裕仁三代目」などと公言したため、ますます困難になった。そこで、伝道の中心をハンセン氏病施設Ｓ園に移したのである。この施設では、園長の知遇をえて、布教を始めた。外からの警察権が及ばない、“治外法権”だったため布教が可能になったという。ここで「患者にキスをする」という伝説的なエピソードを残す。昭和17年開園当初、園内のキリスト教徒は3名と記録されているが、終戦を迎えると150名になっていた。社会的弾圧に対して、施設での布教で勢力を温存したことは、戦後の伝道を開始する基礎となった。

(3) 昭和20年代前半

終戦後のＴ先生の対応はすばやかった。仙台に布教の中心を移して、「仏教とキリスト教」、「民主主義とはなにか」と題した講演を開催した。日本の仏教の日蓮や法然の業績をあげ、これはキリスト教が入るための地ならしをしていた。日蓮・法然はキリスト教の大

番頭、日本でキリスト教は完成する。「このような偉大な先覚者達を、私達の先祖に少なからずもっていたということは日本人としても大いなる誇りでありましょう」(勝利第4号、S26年4月)と敗戦でうちひしがれた日本人に精神的拠り所をあたえる内容である。

布教活動は戦争に例えられて、「三百数十の戦士が伏して、死に勝ち給える。しこうして世々限り無く招き給う者にそそぐる賛歌は天軍のどよめきにも似たるものあり、全体一丸となって救霊戦線に出でいかんとする」と述べられる。このイメージは、戦争を経た青年たちにリアルに感じられたであろう。布教の方法として、路傍伝道がしばしばおこなわれた。「広瀬通りコロンビア前に、徒歩部隊、自動車隊到着、演台を中心に隊形をとって、いよいよ開始となる」(「勝利」6号、S26.7.1)。道端で礼拝をおこなう。信者は公衆の前で歌い、自身の信仰を証言をする。「それにしても愛する祖国のなんという痛ましい姿であろう。我らの眼前に展開しているこの荒廃、しこうしてや、愛する一人子に勝りて、我ら罪人を妬む程に慕いたもう父なる神の、深きお嘆きのそくそくとして迫り来るが故に、我らは黙し難く叫ばざるを得ないのだ」(同上)と感動する。ここには、敗戦国そして敗戦国民の自分たちを、一人子キリストを受難にあわせた神の行為のなかに重ね合わす思想がある。「神国日本」の姿を変えた復活であり、これが人々を惹きつけた要因のひとつとなっている。

2) 指導者不足の危機

信者数は、昭和22年の復活祭は20名前後だったが、昭和26年復活祭では320人(S園信者120名)、昭和28年のクリスマスでは、人数が多くて2つに分けたと記されている。急成長だった。そのため、指導者育成が課題となった。T先生は、入信した青年たちに各集会の担当をさせる教育方針をとった。S教会の集会は、司会と担当からなる。そのうち、担当は特に重要とされていて、聖書の解釈や自分の信仰体験を話さなければならない。T先生に担当を命じられた青年は様に尻込みをした。それに対して「お前の責任は、私が代わりに神様にとる。一生懸命とりくんでいる人に間違ったことを神様が言わせるはずがない」と励ました。青年たちは大変な負担を感じたが、急速に勉強を進める結果となった。実際、これらの青年は教会の指導者へと育っていく。信者数や集会の増加による指導者不足に対して、T先生は、各自に責任を持たせることで指導層の形成をめざしたのである。

2. 各自の創造性による成長 vs リーダーシップの危機(～昭和30年代後半)

1) 各自の創造性による成長

集会は各有力信者がそれぞれの地域で主催し、T先生に来てもらうという形式をとっている。その数は、16ヶ所に及ぶ。昭和28年と同60年の活動状況を比べると、前者の方が事実上の伝道集会である聖書研究会の回数がずば抜けて多く、また、各支部で路傍伝道が行われており布教の熱心さを物語っている。例えば、S園では、1週のうち一日だけ休みがあるだけで、あとは

祈祷会、聖書研究会、路傍伝道が毎日おこなわれている。仙台北部でも、1週間のうち、月、水、木は路傍伝道、金は聖書研究会、土はT先生担当の祈祷会、日の礼拝となっていた。また、この時期の集会案内のなかで、T先生が担当する集会のほかに、2人の信者が主催する集会も別枠で記されている。T先生以外に人望があり集会を担当する力のある信者がいたことになる。T先生の指導者育成は、集団のなかに対抗勢力を作り出すことになっていった。この頃のT先生は、あけっぴろげで「飾らない、隠さない」態度をとっていて、信者の家に何日も泊まって、「あれ食べたい、朝風呂いれる」と“我儘”をいていた。信者の多くも「あの頃の先生が一番先生らしかった」と述懐している。以前と変わらぬ、うちとけた態度で信者と接していたのである。

2) リーダーシップの危機

先に述べた2つの特徴が、S教会に大きな危機をもたらすことになる。ひとつは、指導層の育成を急いだため、何人かの信者が大きな権限をもつようになったことであり、もうひとつは、T先生の信者に接する態度が創立当時と同様、インフォーマルで開放的であったことに由来する。

(1) Kの離反

Kは、この当時、自分の名前で集会を主催できた2人のうちの一人であり、機関誌「勝利」の編集発行人でもあった。熊本でK教会のA氏と出会い、Kは、その霊的雰囲気感動し、T先生や信者をA氏と会わせたのである。K教会とは、病氣治しと異言（霊によって語られる即興的な祈り、外国の言葉の様でもあるが、本人以外には理解不能である）を特徴とした集団で、霊的力を強調していた。KはS教会に足りないのはこれだと思ったという。T先生は、K教会からの連帯の申し入れを拒否する。結局、Kは、昭和29年に20人程の信者を連れて教会を出ていくことになる。有力信者Kの離反は、T先生・信者に大きな影響をあたえたが、教会の対応は次のとおりである。まず、T先生側からは、昭和30年、1月3日の年頭会議で次の基本方針が出された。既成教会のプロテスト・無教会への批判・偽予言者への警戒の三点である（「勝利」48号S 31年2月1日）。特に最後の偽予言者のことについては「勝利」紙上で次号まで続くほどの紙面をさいている。

実際、予言や異言や癒し等、その他この種の霊的能力は、十字架の言が確立するために用いられた、すべて過去のものであって、今や完全なる聖書があり、また、教会の祈りがあり、そしてまた、あえて癒しの必要を覚えない、すでに神の子としての、恩寵の摂理に生きるものにとっては、今またそれらのものを必要としなければまた魅力を感じないのであります。

信者側からも動きがあった。夏期講習会の開催が信者の要望で実現した。その事情につい

て「勝利」72号には、「当時のわれわれの感覚では、ぐらついた仙台支部の屋台骨を建て直し、更に教勢の発展をはかるにはまずわれわれ自身の信仰をもっとはっきりさせて貰わねばならんとして、はじめに、幹部だけの講習会をと本部に要望した」とある。そこに集まった教会員はわずかに32名である。この事件は、霊的信仰を警戒するあまり、信者を知的な信仰へ向かわせることになった。

(2) S園での離反

30年代後半、S園でも有力な女性信者を中心に100名近くの信者が離反した。信者の言葉を借りれば「先生に、つまづいた」という。着るものは最高級品、食べるものも贅沢、そして酒豪、妻との別居といったT先生の私生活のあり方が一部の信者に不信感を抱かせた。「先生は、罪人の頭だから」という認識をもつ信者にとっては、ほほえましい個性と映ったが、信者の中には、クリスチャンにあるまじき人物と見る者もいたのである。これまでは各信者と親しくつき合い、集会で「ステテコ一枚で」歩いても、それはT先生の魅力として理解された。しかし、集団が大きくなると誤解の元となる。これ以後、T先生は公私の区別をつけるようになる。

3. 指揮による成長 vs 自律性の危機（～昭和50年代後半）

1) 指揮による成長

2つの事件によって、信者数が減少し、それ以後回復しなかった。昭和38年夏期講習会75名、41年クリスマス151名、44年復活祭150名、51年夏期講習会141名、同クリスマス250名、54年クリスマス207名という状態である。また、組織的な整備と監視の体制が作られ、ほぼ現在の形になったのもこれら事件が契機であった。組織的には、各支部の責任者によって構成される全体会による統制がはかられることになったが、実質は、T先生の決定に従うもので、中央集権化がはかられたことになる。全体会会則のうち「準会員、求道者に対する指導を怠らず、絶えず油断なくその行状を正確に把握し、その大略を報告しそれに対して伝道所一任とするか、教会全体をもって善処すべきか、審議決定すること」は事件の影響を反映している。

ここで、年頭会議でT先生から昨年の教会活動についての評価がだされ、それを踏まえて信者に1年間の取り組むべき「公案」あるいは「課題」がわたされる体制が作られた。したがって、活動の目標の設定・評価の両者がT先生の手にある体制が作られたことになる。この時期の「公案」は、例えば「精霊のパプテスマとはなにか、該当する聖書の箇所を示し体験的に述べよ」とか「教会を作る根拠について、聖書の具体的箇所をあげて論ぜよ」というもので、主に聖書の内容に関する問いが多かったのが特徴である。T先生は、目に見えるかたちで、信者の信仰を把握しようとする。

2) 信者の自律性の危機

強力な中央集権的力で、統制をとりもどしたT先生は、教義の勉強と信者の教育に力をそそぎはじめた。この時期、教義的には、先に述べた特殊恩寵と一般恩寵が加わり完成したといえ

る。これは非信者にも救いの道を開くことになり、予定説の厳しさを緩和することになった。信者ではない家族・友人も救われるということは、「キリスト教に敵意をもたない人は救われる」というより寛容な考え方につながり、信者は熱心に布教する必要が無くなる。内（信者）と外（非信者）の区別があいまいになったということもできる。また、T先生自身、これ以上積極的な信者獲得は必要ないとした。昭和43年に完成した仙台本部には教会をしめす看板もなく、外から見るとただの民家である。また、礼拝堂は地下にあり、「ローマ帝国時代に迫害されたキリスト教徒」に自分たちを模している。神に導かれてやってくる“自然な”入信者だけを待つ。

T先生は昭和50年に、「向こう2カ年全休」の提案をする。その理由としてあげられているのは、(1)教義の勉強、(2)天皇への建白書の作成の他に、(3)教会の現状批判と題して次のように述べている。

教会の現状は脱線状態にあり、教会本来の正道をあゆみつつありとは認めがたい...（全体会で）戦況報告がひとつもでない。そして、そのための交互力を提供するという議題の審議をいまだかつて聞いたことがない。...それがゆえにわたしの責任として進んで解散、しこうしてもわたしに余命があれば再出発をする他道なしと考え、このことを教会も自らの責任において十分善処する道を考究することを2カ年の議題として、教会人各自の責任を受けとめ、それに真剣に取り組み、結論を出してもらいたい。

そして、「この二カ年静かに諸君と距離をおいて、客観的に監視していただきたいです」と締め括っている。信仰的に、何が足りないとT先生は考えていたのか。あわせて発表された「聖書担当者の心得」では、一番欠けていることは口先だけではなく、心に信じ、それを身体で実行表現して救われることだといい、「もはや、心で信じるのは、たくさん！」と指導層に対する不満を露にしている。T先生は昭和44年の時点で「長年にわたってキリストの知遇を受けているのに、何ら決定的な影響をもたらしていないとすれば、本当にイエスの知遇を受けているのかどうか疑問になる」（「仙台支部便り」第97号、5.15）といっている。これだけ教えているのに、なぜ身につかないという苛立ちである。救われるまでの過程、「信心の修行」が強調されるようになったのもこの頃である。背景には、先の離脱事件以来、霊的体験についてT先生が警戒的になっていたため、信者には知的なキリスト教が強調されたこと、T先生の強い指導を受けるうちに信者が依存的になったことがあげられる。

3) 青年層の台頭、トオルとマモル

指導層を批判するのは、T先生だけではなかった。昭和37年頃、教会に青年の集まりができた。この第1期青年部はT先生に惹かれて入信したトオルとマモルを中心とした20代の青年グ

ループで、17名からなる。仙台支部に所属し、機関誌として「子羊」(ガリ版、途中10号から活版)がある。「子羊」は、完全に青年部内向けのもので、内容は、青春論・恋愛論・小説・詩等であり、同人誌のような趣がある。基本的にみられるのは「自分たちは信仰的に若い者ですから、よろしくご指導ください」という姿勢だが、なかには、集会を批判するものもある。批判にしても「仙台支部の集会に対する私のヒトリヨガリな不満」というように控えめである。内容も、集会の時間が長いとかもう少し打ち解けた集まりにならないかとかいうもので信仰の中身についてではない。それが、昭和41年に「子羊」が活版印刷になった頃から徐々に変化する。第10号には、T先生の全体会での発言にもとづいて青年部が正式に組織のなかに位置づけられたことが記されている。この頃から、トオルは「仙台便り」に青年の代表として筆をふるった。たとえば、「打ち合わせで集まった青年部4名の会話のなかで、二代目の信仰はあれ以上伸びないだろうからわれわれ三代目が頑張らなければならないこと...イエスさまに対する信仰か、先生に対する信仰かわからなくなっている兄弟姉妹が割合に多いように思われること」(「仙台便り」88号、S43.8.15)や「キリスト教には仏教や儒教などの思想は不必要、相手にわかる言葉で話そう」(「仙台便り」112号、S45.8.15)という先輩やT先生への批判が示されている。青年の主張が公的に「仙台便り」にこれほど載せられたことはない。それが可能だったのは、T先生の青年部に対するバックアップがあったからにほかならない。

これに対して、指導層は世代交替の若い力の台頭は認め、礼拝や集会も「語る人、聞く人が一丸と成り全員参加の集会内容として形をやぶる恩恵の充満があり」と活性化の効果を認める。しかし、「かつて主力だった兄弟の交替と休職は大きくひびき、若手はなお一歩未熟で非力だというのが実情であろう」(「仙台支部便り」141号、S48.1.15)と青年の挑発を受け流している。この間、青年部の世代交替が進み、改革の先鋒であったトオルは結婚、I伝道所の責任者となって青年部を離れ、同じくマモルは、自分の伝道の成果を幹部が評価してくれないと教会から離れていった。個人のライフサイクル上の位置の変化、教会の組織的な軋轢が二人の去就の背後にある。

4. 「権限委譲による成長」vs 分裂の危機(～昭和61年)

1) 「権限委譲による成長」の実際

T先生は、教会の様々な活動から引退すると宣言した。権限を全体会に委譲して、信者の自律性を育てようとしたのは先に述べたとおりである。次にあげるのは、昭和58年1月17日(日)仙台本部での礼拝風景を記録したフィールドノートからの抜粋である。

礼拝は、賛美歌・祈祷を交えて行なわれ普通のプロテスタント教会と変わらない。説教壇はあるが、それは使わずテーブルのまわりにすわっている。出席者全員で聖書を読んでいき、担当の信者が解説を加える。それが終わると、討論・話し合いに移る。最初はいなかったT先生も何時の間にか加わっている。女性も男

性もT先生が話し始めると、先生の方へ顔を向け、まるで「最後の晚餐」を思い出させる。先生は担当者の話を聞いた後、次のように言う。

T先生「きみはキリストを見て信じるのか」

担当「えー、それは…」

T先生「(笑いながら)ではきみはいつ生まれたのかね、誕生日はいつだね。*」

担当「誕生した日ですか。」

T先生「そうだ、具体的に言えるだろう。」

担当「まだはっきりしないんですけど。」

T先生「(笑いながら)そこが問題なんだよ、その時わからずとも今になればはっきりわからねばならないんだ。今日の担当は - 35点。」

* 体験的に、キリストに出会ったときをたずねている。

T先生は担当がうつむくを見て、トシアキさんに指で合図して同じ事をきく。トシアキさんは大学で宗教を学んだ経歴をもつ。T先生もトシアキさんの発言にはうなづくことが多い。

トシアキ「わたしは、まあはっきりというても(はっきり言えるだろうというT先生の声に)ええ、こん教会くる前だね、昭和27、8年でしたかね、大分昔ですからね。」

担当「そういったことが言えるようになるには、どうすればいいのですか。聖書を勉強するとか…」

T先生「いや、聖書はハシゴだね、二階にあがってしまえば、すべてがわかるようになる。」

担当「すべてわかりますか、聖書でもそのすべての個所が…」

トシアキ「たとえばですね、(黙示録のある個所について尋ねる)」

T先生「(それについての解釈)」

トシアキ「ふむ(感心したように)すべてがわかるのですね。」

T先生「だから、二階にあがってしまえばいいんだけどね。あとからくる人のために残しておいて、そのあがり方を教えようというわけだ。」

ここでお茶が配られる。担当が再び発言する。

担当「わたしは、- 35点もらったんですが…やっぱり0より下なのですか。」

T先生「0なら計算できないべさ。」

担当「言葉はわかるのですが、実体がないんです。」

Ｔ先生「修業が足りないんだ、それは皆さんよく勉強していなさるんだが、実際に見ていないんだ。ただ信じれば義とされるのではないんだ、今の教会はそうだね、見なけりゃいけないんだ。」

次に、ガン末期で入院中のある信者の話になる。

Ｔ先生「あの人は、もう死を見ざるものだね。死を味わおうにも味わえないね。」

担当「特別恵まれた人ですか。」

Ｔ先生「うん、なんというか、一瞬が全部に広がるんだなあ。」

トシアキ「先生のなかではそうでしょうけど、われわれは…（笑い）そんな切羽詰まったことにならないで聖霊に充たされなければならないんですね。そのために修業が必要なわけで。」

終了後、教会の食堂でＴ先生と他の信者数名と昼食をいただく。

作道「礼拝の後のあのような討論というのはなかなかよいですねえ。」

Ｔ先生「礼拝でね、そういうのはやらないわけ、あれは宗教改革で潰し損ねた儀式なの。そう儀式ばらないの、聖餐式でもあれですよ、うちはあんななんか甘いような…」

作道「ぶどう液ですね。」

Ｔ先生「そうそう、そんなものは使わないの。葡萄酒。赤玉なんて甘いのがなくて、ちゃんとしたワインを使うのよ。キリストだって飲んだのはワインでしょ。（少し声をひそめて）それで余ったのは、皆私が飲んじゃうの（一同哄笑）。」

ここで別の信者がやってくる。息子の転職について相談する。

Ｔ先生「いいんじゃないですか、それは思召しですよ、うまくいきますよ。」

Ｔ先生は、公的な役割からは退いたが、実質的には、聖書の解釈から信者の生活に至るまで指導している。形式的には、権限委譲をしたとは言え、信者に代わって神に責任をとるというＴ先生の姿勢がそのまま残っている。青年たちは、指導層を「大人」とよんでいる。この状態は、青年たちに、「大人」層の弱さを際立たせることになった。

２）青年のサボタージュ

礼拝の間、青年たちは、机に着くことをせず、一步下がった所にパイプ椅子をおき、勧められても前に出ようとはしなかった。司会者に促されても何も発言しなかった。だが、単に先輩信者「大人」に遠慮していたのではない。青年部のリーダーであるシゲさんに「引退したのに、なぜＴ先生は集会にでてるの」と言うのと「何度も引退、引退っていつてるんだ、でも（大人た

ちが) 肺甲斐ないからつい(T先生も)口がでちゃう」と皮肉っぽく答えた。青年たちは、T先生と「大人」の間の親子のような関係に反発していたのである。主にその矛先は、T先生の説教の解説や教義的解釈を担当してきたトシアキに向けられた。シゲさんは7年前に務めていた会社をやめ、教会の専従者となった青年で、T先生の秘書をしている。神の声を聴くという宗教体験をもつ。マモルとトオルのあと、第2期青年部の中心的存在である。第2期青年部は、第1期に比べて教会においてより特殊な位置を占めていた。教会組織としては、各支部・伝道所の責任者による全体会があり、そのうえに長老会がある。青年部は組織的にはそれらの下位にあるが、特殊な意味でT先生直属とされた。信仰の指導を直接T先生が行う集団として位置づけられたのである。この特別扱いが青年たちに、まだ「救い」を確信できないでいる「大人」に対する、これから「救い」を確信する青年としての優越感を植えつけていた。シゲを中心に、トシアキさんに代表される「大人」への反発は高まったが、それもインフォーマルな集まりのなかで述べられるのに限られていた。というのは、その背後には「神が作りたもう秩序」を乱すことへの恐れがある。「神から立てられたT先生」が作り上げている秩序は神の秩序であるから、たとえ不都合なことがあっても自然と解決に向かうはずという楽観的な期待、自分が不都合だと判断する事が神の意志にかなったものかどうかかわからないという不安からこの姿勢は生じる。

要約すると、権限の委譲は形式的にはなされたが、実質的にはT先生の指導下にある。そのなかで、青年層が「大人」への反発を高めていた。それは、先に、T先生が青年部を直属にして指導したことによる。

3) T先生の「昇天」による分裂の危機と統合

(1) 青年の要求

T先生は、昭和58年に入院、回復が望めない状態になった。この時期に、シゲさんが主張した内容は以下の通りである。

制度化の要求：今までT先生の責任でおこなわれなかった聖餐や洗礼の実行。参加資格を認定する仕組みの整備。

指導層批判：役員（指導層）に何をいっても自主的に決定する事ができない。T先生への盲従してきた結果である。

指導者の降格：指導者のなかに指導者としての信仰をもっていない人がいる。指導者を降りて欲しい。

シゲを中心とする青年たちがこのような要求をかかげるに至ったのは、T先生の実質的影響力の弱体化とともにリーダーであるシゲが独自の宗教体験うけ、自分の行為の正当性を確信したことによる³⁾。T先生は昭和59年11月に「昇天」した。その直後に行われたクリスマス礼拝（昭和59年11月25日）で、次ぎの光景に出会った。

準備のため9時頃会場に着くと、トシアキさんがいる。しかし、肝腎の青年たちがいない。トシアキさんは「今にくるから」と僕に手伝いをさせる。9時半頃になってやっと青年たちがやってくる。すぐに仕事を始めるでもなく、ロビーで煙草をふかしたり談笑したりしている。僕がたまりかねて、「トシアキさんがカリカリしてるよ、そろそろ準備しろってさ」というとニヤリと笑って「まっ、一服いれてのんびりと...」という。その側をトシアキさんが看板をもって出入りする。それを見て、「あまり焦らせてもあれだからそろそろ」と仕事にかかった。

全部終わって、青年部の反省会をスナックで行なう。会費1000円。カラオケ大会の最中に、シゲさんに今日の礼拝について尋ねると、「(トシアキさんは)やっぱり学者なんだね、一人で焦っても自分では動けない、司会・聖餐のやり方がまづかった、だって事前の打ち合わせに来ないんだもの、席の座り方も要領を得なかった、本当に信仰ができると身体のほうも動くんですけどね」と皮肉を言う。

両者の緊張関係は、表面上は年末の話し合いで解決した。青年は、礼拝の司会や各種の行事の総括、日曜学校の校長等の要職を任され、主任会・全体会への出席も許されるようになった。シゲもⅠ伝道所の責任者になった。確実に青年たちは教会内での地位を向上させたのである。

(2) 長老・「大人」の危機

しかし、T先生が苦しみながら「昇天」したことは、古参の信者にも衝撃をあたえた。週一回、仙台伝道所では町の中心部に場所を借りて聖書研究会を行なっているが、その席上のことである。長老カツゴロウとトシアキさんとの会話(昭和60年1月16日)である。

伝道の書12章についてトシアキさんが「言葉を味わうことです」というと、カツゴロウ(長老、第一期入信、仙台伝道所責任者)が猛然と発言する。

カツ「そんな生やさしいものじゃありません。ただ、頭で理解するのではありません、大変なことです。先生ほどの大先生でも。」

トシアキ「いや、始めはそうだということで・・・」

カツ「目づぶっているのです。明日、死ぬかもしれない。もしそれを知っていたらいてもたってもいられない。自分自身で経験して体得した人の言葉でなければ人の心を打つ事はできない。やっぱり実証がなければ力がない。生きてる間に体得しなければ意味がないのです。先生ですら死ぬ間際になって、復活は真実だといわれた。これは情けない気がする。」

T先生の死がこの長老に危機感を抱かせたことがよくわかる。T先生の死によって信者はT先生を通じてではなく正面から信仰に取り組まなければならない。この長老はやがて自身自身の集会を主催するようになる。シゲも「もう大人たちに何言っても無駄。結局わからないのね、今、若い人がついて来ているから勉強会をもってんだね、彼らに期待してるんだ」と自分の集会を主催している。表面的には新体制によって組織は結合されたように見えるが、実際は各自が自分の信仰にとりくみ始めたのである。それぞれの活動の底には、知識ではない体験主義・根本主義的な信仰への探究がある。S教会においては、権限の委託は実際にはT先生の死後おこなわれたことになる。これは危機の克服を通じてかちとられた成果ではなく、結果として権限の委託がなったわけである。組織としては、S教会はT先生の死後、統制の危機に陥りながらも、ゆるやかに人々を結びつけている状態にある。

(3) 「神があたえたもう秩序」

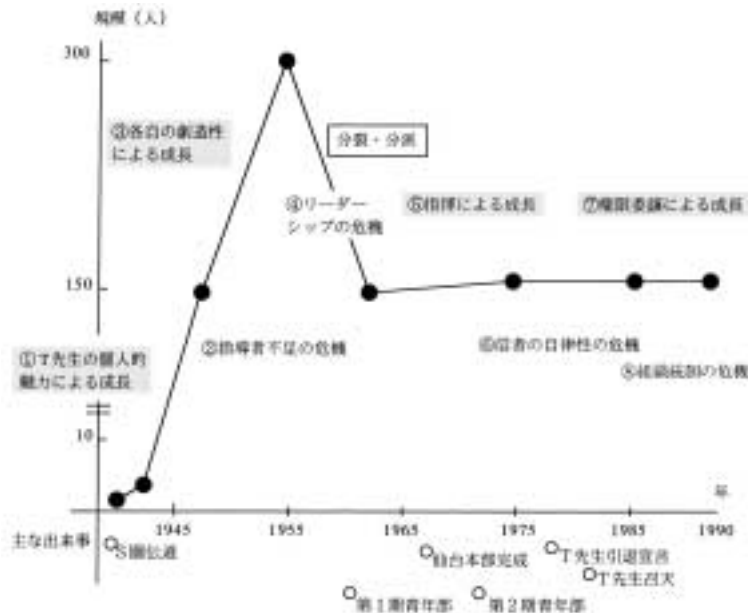
では、なぜ分裂しないのだろうか。そこにはやはり「神があたえたもう秩序」の概念がある。昭和60年1月20日の礼拝で説教をした新しい責任者Tは、「行く行くは、ギリシア語、ヘブライ語もできる人を育てなければならない。やっぱり20歳前後の若い人でね」と言った。そこには知的な信仰をめざす姿勢がある。シゲさんは「あいつは、先生が病気で頭おかしかったとき、(責任者として)決めたことだから」と言い、ケイさん(昭和22年入信、指導層の一人、会社定年後教会の伝道に従事)も「Tさんを長老会が代表に選んだのは、はっきり言って間違いです、これは」という。青年たちが、「ケイちゃんがそう言ったら僕たちはどうしたらよいか」と笑いながら問いかけると、「でもそうだけど、こういう風に決まったんだから、皆それを盛り立てるように結束してね、まあ、間違いだったら途中で(神様が)替えさせるでしょうし」と答えた。「神があたえたもう秩序」の概念の強さをよく示している。

・考察

以上、S教会の歴史を指導者と信者の権力関係にもとづき4段階に区分し、各時期における集団の特徴を分析してきた(図3)。グレイナ - の経営戦略を指導方針におきかえて、S教会の歴史的展開にあてはめ記述を試みたが、それはおおむね妥当である。しかし、組織の規模、集団の歴史によって必然的に生じる指導方針や指導者・信者間関係の変化からだけでは集団の動的な変化をとらえられないことも明らかである。

S教会の場合、規模の拡大、組織の年齢要因によって、小規模な親密な集団に、指導層・信者という分化が生じ、さらに青年層が加わり、組織が複雑化する。内と外、公と私という区分が生じ、それに対応して、集団の活動を自己定義し外部に説明する必要が生じ、教義が包括的な内容(「一般恩寵」)をもつようになる。その結果、集団は秩序を安定的に維持することができる。たとえば、職場で地鎮祭を行う立場になった信者の悩みは、非キリスト教信者にキリスト教への憎しみや懐疑をあたえないためという理由で解決する。個人のライフサイクルの進展にともなう、世俗社会との妥

図3 S教会の発展



協を迫られる問題へも動揺なく対応できる。

このような経過を通観すると、組織の成長は、「救い」のための、可視的な必要条件 - 神に見守られての平安な生活 - を整えていく過程とみなすことができる。つつがなく送る生活は「神があたえたもう秩序」の証拠として正当化される。これは、形式化へ向かう途である。

しかし、根本主義的プロテスタント集団においては、世俗とのつきあいの円滑化や安定的な組織運営は本来の目的ではない。本来の目的は、個々人が神の「救い」にあずかることにある。つまり、組織や世俗生活ではなく、神と個人との関係が問題だったはずである。本来の目的を覚醒させる働きをしていたのが、T先生である。T先生は、組織の責任者として運営を統括するとともに、特に組織が相当規模になるにつれて、先の安定的な組織の意義をうち消す働きをしている。さらに言えば、T先生は、たしかに「死を飲み干した者」として「勝利」を確信していたが、救われてある者として、超越した者としては決してふるまわなかった。その意味で、正当なプロテスタントの伝統に沿っている。T先生は、信者にとって、神の国への「はしご」であり続けようとした。少なくとも本人はそう自己定義していた。そこには多分に牧夫的な、養育の態度があったにせよ、信者の自分への帰依や依存をつねに「はしごはずし」によって、そらし続けている。大澤（1995）の描く麻原像とは対照的に、超越的存在（第三者の審級）が経験領域へと回帰するのを許さない姿勢である。霊、奇跡を拒絶していたことを思い出そう。T先生の姿勢は、組織としての、安定的な教会を、神と向かい合う個人の集まりへと、かたまりをモナドへと解体させていたのである。第3、4期に、その役割を担うのは青年たちである。当初、S教会では「大人」世代とS教会のライフサイ

クルとは“一致”していた。すなわち、「大人」が実年齢的に青年から中年に歩を進めるにつれて、S教会も組織的に安定し教義も包括的になった。それは、「大人」世代が、世俗社会で信仰生活の妥協をはかる過程でもある。青年たちは、身近な「大人」を否定しT先生を重要な他者としながら、インフォーマル集団、青年部のなかで、青年期のアイデンティティ確立という課題にとりくんだ。彼らからみれば、「大人」は既存の秩序に安住した信者である。指導者T先生の死、青年のプロテストは、「大人」たちの中年期・老年期の危機を引きおこし、信仰への関与を深める結果となった。

集団のライフサイクルは成長とともに組織的統合に関する危機をもたらす。S教会の場合、特に第3期までは、そのような危機への対応が集団を成長させた。しかし、信仰的には、信者間のライフサイクル上での“ずれ”が危機と改革を引きおこす。それには、教義や指導方針のなかで、組織の規模的発展をどのように位置づけるかという問題がかかっている。T先生は第3期から組織的発展を抑えて、目に見えない信心の修行へ信者を向かわせたのである。

S教会の特色は、自律的な組織発展の意義を無効にする“信仰覚醒運動”が指導者自身や青年信者層によって生じ、規模的な組織展開を抑制し、原点へもどそうとする動きがみられるところにあるといえるだろう。

注

- 1) 拙論(1992)に詳しく報告した。
- 2) 拙論(1984)で二人の青年とT先生の出会いについて紹介している。
- 3) 拙論(1986)を参照。

引用文献

- Beckford, J.A., 1973, Religious organization. current sociology, vol.21, 2, 1-170.
- Greiner, E.L., 1972, Evolution and revolution as organizations grow, Harvard Business Review, 50, 37-46.
- Hackett, R., 1980, Thirty years of growth and change in a west African independent church - a sociological perspective. Journal of Religion in Africa, 11, 3, 212-224.
- Johnstone, L.R., 1975, Religion and society in interaction: the sociology of religion. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, N. J.
- Johnson, B., 1963, On church and sect. American Sociological Review, vol.28, 539-549.
- 小林幸一郎, 1988, 組織の成長と変革, 青木和夫(監修)小林幸一郎, 梅沢正(編)『組織社会学』サイエンス社, 175-228.
- 森岡清美, 1980, 宗教運動の展開過程. 宗務時報, 1-9.
- ロバートソン, R. 1983, 『宗教の社会学』田丸徳善(監訳)井上順孝・対馬路人・吉原和男・渡辺雅子(訳)川島書店. (Robertson, R., 1970, The sociological interpretation of religion. Basil Blackwell)
- 作道信介, 1984, 宗教集団の発展段階と入信過程 一宮城県S教会を対象として. 日本文化研究所研究報告,

- 別巻 21, 31-59.
- 作道信介, 1986, 羊と羊飼い ― S教会におけるアイデンティティの確立. 日本文化研究所研究報告, 別巻 23, 1-36.
- 作道信介, 1988, 若者のオカルトブームと新々宗教の接近. 青少年問題, 14-21.
- 作道信介, 1992, 羊飼いの肖像 ある日本のキリスト教の成立. 弘前大学人文学部「文経論叢」第27巻第3号, 53-101.
- 対馬路人, 1987, 信念をともしする集団. 佐々木薫・永田良昭(編)『社会集団の心理学』有斐閣, 273-301.
- 大澤真幸, 1996, 『虚構の時代の果て オウムと世界最終戦争』筑摩書房.
- ウィルソン, B. R. 1972, 『セクト ― その宗教社会学』池田昭(訳) 平凡社. (Wilson, B., 1970, Religious sect. New York: McGraw-Hill)
- 安村克己, 1985, 組織成長の不連続性 カタストロフィー理論の応用. 応用社会学研究, No.26, 65-73.